

松任谷 正隆の

僕のひとりごと

25

VOL.25 家賃 1 万 2 千円の家

前回の続きである。僕たちは月 1 万 2 千円の家を狭山に借りることになった。大学の 2 年の時だ。

4 人で割ると月 3000 円。まあ、それくらいならなんとかなるだろう。

家は例のヒッピーの家から 100メートルか、もう少し離れていたか。

あちらが平野の真ん中あたりだとすると、こちらは山の麓みたいな感じ。

木が割合うっそうとしたところにあった。

見た目はアメリカ村だけあって日本離れしている。門はおろか玄関だってない。

入り口を入るといきなりダイニング & キッチン。

奥に 6 畳くらいのベッドルームが 2 つ、病院の払い下げみたいなベッドが 2 つずつ入っていた。

そしてバス、トイレ。これで 1 万 2 千円は確かに安い。

東京で借りたら 10 倍以上する、いや 30 倍か。その代り何もなかった。

まず楽器車を買おう、ということでドラムの H が見つけてきたのが 10 万円のデリカ。

4 人で割ると 2 万 5 千円はちょっと痛かったけれど、これがないと何も始まらない。

仕方なしになけなしのお小遣いで払った。

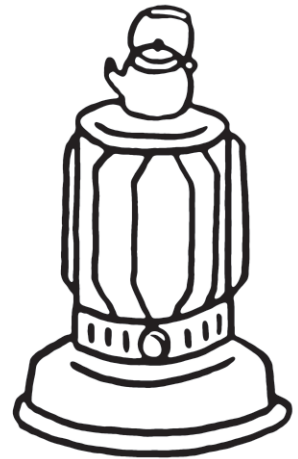
やってきたのは本当にオンボロ車だったけれど一応ちゃんとエンジンもかかったし、何よりも動いた。

さあ、家具を探そう、いろいろ必要だ。とりあえず寒いからストーブが欲しい。

カーペットもね。ということで何も無い居間でミーティングが始まった。



だれかがストーブなら、石油のやつが神泉駅のそばに捨ててあったのを見た、と言った。
おおっ、と一同歓声が上がる。そういえば僕は旧山手通りの路地裏に
カーペットが捨ててあるのを見た、と別のメンバー。
よし、あそこらへんならどちらも近いから夜遅く、人氣がなくなったら繰りだそう、
ということになり、丑三つ時になるのを待って繰り出した。オンボロデリカに男4人。
クルマが何だか臭いので冬なのに窓を開け放しである。
楽しいなあ、とベースのG。青春とはこういうことを言うんだろなあ、
などとこの時ばかりはちょっと楽しかったのを覚えている。
やがて目的地に着き、目的のものは見つかったのだが、
はて、これは捨ててあるのだろうか、干してあるのだろうか、という議論になった。
いや、議論は3秒で終わった。人の物だったら何週間もここに置いてあるわけがない。
こうして目的のものはゲットし、そのほかにもいろいろとゲットし、僕たちは帰途についた。
はっきり言って拾ったものは汚いものばかりだった。
うえっ、とか言いながらそれでもなんとかストーブに火を付けた。
不完全燃焼によるもくもくとした煙が立ち上って部屋を充満させる。
やばいね。これで俺たち死ぬかも。クルマだけでなく家まで窓全開である。



その夜、寒さのせいか僕を含む3人は睡眠不足に陥ったのだが、快眠をした、という奴が一人いた。
スチールギターのKだ。彼は路上でも充分暮らして行けそうなタフな奴だから、ベッドなんて天国だったのだろう。
朝から大きな音で音楽を鳴らす。安物のステレオは誰かが家から持ってきたものだ。
この日から、僕らの朝はボズスキャッグスのダイナフローという曲に決まった。



松任谷 正隆（まつとうや まさたか）

作編曲家、音楽プロデューサー。

4歳からクラシックピアノを習い始め、14歳の頃にバンド活動始める。

20歳の頃プロのスタジオプレイヤー活動を開始し、

バンド“キャラメル・ママ”、“ティン・パン・アレイ”を経て、数多くのセッションに参加。

その後アレンジャー、プロデューサーとして多くのアーティストの作品に携わる。

鈴木茂、小原礼、林立夫とともにバンドSKYEを結成。

2021年10月、デビューアルバム「SKYE」をリリース。

日本自動車ジャーナリスト協会に所属し、「日本カー・オブ・ザ・イヤー」の選考委員も務める。

著書に「松任谷正隆の素」「おじさんはどう生きるか」などがある。